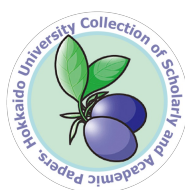




Title	福島で映画『家路』を作るにあたり考えたこと
Author(s)	久保田, 直
Citation	科学技術コミュニケーション, 17, 79-83
Issue Date	2015-07
DOI	https://doi.org/10.14943/70482
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/59583
Type	departmental bulletin paper
File Information	web_Costep17_7.pdf



福島で映画『家路』を作るにあたり考えたこと

久保田 直¹

What I Was Thinking While Making a Film “HOMELAND” in Fukushima

KUBOTA Nao¹

キーワード：福島，映画制作，当事者意識

Keywords: Fukushima, film production, sense of ownership

1. 自己紹介

こんにちは。映画『家路』¹⁾の監督をしました久保田です。よろしくお願いします。今日の「なつかしい未来へ～福島の再生と科学技術のコミュニケーション」というテーマに僕が適しているかどうか、ちょっと分かりませんが、映画『家路』をどういう思いで作ったのか、作るプロセスにおいてどんなことと触れ合って何を感じたのかというようなこと、そして『家路』のシーンについて、こういう経緯でこんなシーンが生まれたんだというような裏話的なことを少しお話ししようかなと思っています。

2. 『家路』撮影の動機：当事者意識を持ち続ける

最初になぜこの映画を作ろうと思ったかというところからお話します。『家路』の制作は、2011年の震災直後、たぶん1週間ぐらいの早い段階で考えました。脚本を担当した青木研次は、僕と30年来の友人です。彼と震災直後に喫茶店でお茶を飲みながら話をしてしていると、当然震災の話になりました。そこで二人で「震災のことと原発事故の問題というのは、別に考えないとまずいよな」ということを確認したのが始まりでした。

天災と人災の違いということは当然ありますけれども、そのとき僕と脚本家が思っていたことは、当事者意識というものを原発事故に関して思い続けなければまずいのではないかということでした。ただ、長い間いろいろなところの取材をしている中で培った直感の一つだったと思うのですけれども、二人ともたぶんこのことはあつという間に



図1 講演の様子

2015年4月23日受納 2015年6月2日受理
所 属：1 映画監督
連絡先：<http://solidjam.com/>

風化していくのではないだろうか、という危機感というか危惧を覚えていました。その中で何かできないかというのが、映画制作の発端です。

当事者意識を持ち続けることはとても難しいことだと思います。北海道の皆さんはどうだったか分かりませんが、震災直後、東京在住の人はそうとう当事者意識を持っていました。というのは、東京は地震でかなり揺れたのです。僕は3月11日には東京にいなかったのですけれども、家族や友人たちからそのときの話を聞いていますので、状況はよく分かっています。恐怖が体にまわりついてくるという感じですかね。そんな中で原発事故が起こり、数字だけが踊っていく社会状況の中で、何に怯えているかということや、何を信じていいのかということすら分からない中で、東京の人も、ものすごく不安な日々を送っていたと思うのです。だから、原発事故を本当に自分のこととして、これからいったい自分たちはどうなるのだろうと考えていたと思うのです。ところが1ヵ月も経たないうちにどんどん当事者意識が薄らいでいって、やがて「福島、大変だね」という他人事に言葉が変わっていきました。当事者意識を持ち続けるというのはやはり大変なんだと思います。僕はいまでも『家路』を作って、この映画を残すことによって、こういう現実があったのだということを、できるだけきちんと自分のこととして捉え続けたいと思っています。

3. 現在進行形の脚本作り

皆さんもご存知のように、何一つ根本的な問題は解決されていませんし、基本的な状況も変わっていないと言っても過言ではないと思っています。そんな状況の中で『家路』を撮ろうと思って、福島に脚本家と一緒に何度か足を運びましたし、脚本家は脚本家、僕は僕でそれぞれ福島に赴いて、いろいろなことを感じる時間をそこで持ちました。そして脚本家と、福島でこんなことがあったとか、こんな人に出会ってこんな話をしたとか、この風景がすごかったというようなことを、お互いにキャッチボールしながら脚本作りをしていきました。

脚本作りの中で、一番大変だったことは、状況が現在進行形だったということです。実際に起こったことをベースにして劇映画を作る場合はあります。その場合、物事が解決、もしくは終わっていることを劇映画化することがほとんどだと思うのです。一方で『家路』の脚本は本当に震災直後から書き始めました。だから、日々変わっていく状況の中でいま書いていることは本当に大丈夫なのだろうか、無駄にならないのだろうかということ、自分の感じている思いは本当にこれでいいのかということが全く分かりませんでした。

ただ僕も脚本家も、一日でも早く何か作って世に出したいという強い思いを持っていました。5年も10年も経ってこの脚本を出してもダメなのではないかと、そのときは思っていました。脚本家といろいろとキャッチボールをしながら難しい状況の中で脚本作りを進めていき、意外と早く3・4ヵ月後ぐらいには第1稿が挙がりました。そこからお金を出してくれそうなところに企画を持って行ったのですけれども、なかなか最初のうちはお金が集まらず、「やっぱり原発がらみの映画だ」という印象を与えると、なかなかお金を出してくれる人たちはいないんだな」という現実を味わいました。ただし、原発反対を訴える映画を作ろうと思っていたのではなく、最初から家族の再生の物語を基本のテーマにしています。日本の中に自由に立ち入ることができなくなってしまったエリアがあり、そこがふるさとだという家族の中にはいろいろな家族がいらっしゃると思うのですけれども――『家路』の主人公のような家族がいても良いのではないかとこのところから脚本作りは始まっています。

そんな中で「よし、やろう」と言ってくれるところが出てきて、割とそこからはトントン拍子に話が進んで映画を作ることができ、2014年のちょうど3月に劇場公開という運びになりました。

そのときの舞台挨拶でも言ったのですけれども『家路』を作った理由には、原発事故のことを風化させてはいけないということと、当事者意識をずっと持ち続けたいという思いがあるので、この映画に寿命があるならば、一日でも長く見ていられる映画にしたいなという思いがあります。

『家路』の上映から丸1年経っています。昨日、こちらで上映していただいたのですけれども、僕個人としては客観的に見ても状況は何も変わっていませんし、映画では普遍的な家族の物語を紡いだつもりなので、まだまだ見ていられるんじゃないかなと思っています。皆さんがどう感じたかというのは、またどこかでお聞かせ願えればと思います。

4. 映画作りで考えたこと

映画作りに入ってしまった中で思ったことと、それでシーンが変わっていったようなことがいくつかありますので、そこをお話します。

4.1 福島で撮影すること

まず、制作費が潤沢ではなかったのですね。出演者を見ると、大変豪華なキャストなので、さぞかしすごいお金が出たのだろうと思われるかもしれませんが、制作費はとても少なかったです。脚本を持って松山ケンイチさんのところだとか、田中裕子さんや内野聖陽さんに会いに行き、本を読んで共感してもらって、キャスト本人が「出る」と言ってくれたので、成立した映画です。

そんな中、予算が少ないということが幸いしたということでもあるのですけれども、『家路』をどこでどう撮るかが自分の中で大きな課題になったのです。

福島で撮るのか撮らないのか、というのが一番大きな課題でした。予算が少ない作品なので、セットを組んで撮影はできない状況でした。僕としては福島で撮りたいという思いが強くあったのですけれども、二つのことで、福島で撮って良いのかどうかと悩みました。

一つは、健康問題です。映画にはたくさんの方が関わります。キャストもそうですけれども、スタッフにも若い人たちがたくさんいます。放射線を浴びて、何年後にどうなって、というようなことを考えると、ある程度の年齢の人たちは大丈夫かなとも思います。けれども、若いキャストやスタッフに対する責任を、自分たちが「大丈夫だよ」とは全く言えない状況の中、どう撮るかについては考えました。それに対して、彼らに対して責任をもつという考えは放棄しました。そんなことできっこないということで、それぞれのキャストやスタッフが、とりあえず自己リスク、OWNリスクという形で撮影に参加してもよいと思ってくれた上で、しかも福島で撮るということに対して何かの意味を見つけたり、決意をしてくれた人だけに参加してもらった映画にしようと考えました。

もちろん、スタッフの中で「ちょっとできません」と言って降りた方も何人かいました。それも当然だと思うのです。けれども、たまたま今回はそういう方ばかりではなく、福島でやろうと思ってくれたスタッフが多かったのです。このように映画をつくることができました。

もう一つ悩んだことはモラルの問題です。これはいまだにちょっと、僕の中で答えは出ていません。僕は30年ぐらいずっとドキュメンタリーを撮ってきました。福島の川内村とか富岡町²⁾をドキュメンタリーで取材することに関しては問題ないと思うのです。けれども今回の『家路』はあくまでも劇映画という形で作ろうと考えました。劇映画はどういう考え方をしても、やはり商業映画になります。この場合、福島の風景を借景して良いのかということは、とても難しいことだと思っています。ただ、じゃあなぜ富岡町と川内村に決めたのか。

富岡町の商店街を、バイクを引きながら松山ケンイチと友人である山中崇が扮する二人がずっと歩くというシーンがあります。映画をご覧になられた方は強烈なシーンとして記憶にあるかもしれ

ません。ちょうどどこで撮るかというのを探していたとき、富岡町の商店街が一時解除という形になって、いわゆる時間制限付きの一時帰宅が認められたのです。ゲートが開いた、という感じで、とりあえず入ってみるかこの商店街に足を踏み入れたときに、ちょっと動けなくなったというか、人がいなくなるってこういうことなんだという、言葉ではなかなか表わせないような感情というか思いが、自分の中に湧きおこってきたのです。

もう一つは川内村。映画の最初のほうで、主人公が川の水を汲んで米を炊くシーンがあります、その川の水を汲みに行っているあたりと、最後、田植えをするところ。

川内村で、自分たちが立っている場所は人が入れる場所なのですが、その川のところから先は入れない。けれども、川の向こうの山の風景がものすごくきれいだったのです。緑がきれいで、とても天気の良い日だったので、川に陽が射してキラキラと輝いている。そこに人が住めない、入れないってどうということなのだろうか考えると、きれいであればあるほど怖くなった。

この二つの場所に立ったときに、「ここで撮らなきゃ駄目なんじゃないか」と自分の中の思いを強くして、モラルがどうのこうのと言っている場合じゃないなと思い、この場所で撮ることにしました。このことに対しては、最初にも言ったように、僕の中でまだ答えは出ていません。答えは出ていないのですけれども、ここで撮って良かったなと、今は思っています。

4.2 ラストシーンの変更

最後に脚本が一番大きく変わった部分の話をします。もともと、第1稿が挙がる前の『家路』のラストはこういうラストではありませんでした。皆さんご存じかどうか分かりませんが、長谷川和彦監督の名作、映画『太陽を盗んだ男』³⁾ ぐらいの方向というか、わりとラジカルな方向で考えていました。

『家路』の中で、汚染した土をトラックに乗せて東京に向かうんだけど、結局土を乗せたまま引き返すシーンがあります。このシーンは最初、国会議事堂の前で土をばら撒くことを考えていました。それをなぜ止めたかという、何度か福島に行っているうちに知り合いになって、最終的には映画にもものすごく関わってくださった秋元美登さん⁴⁾ という農家の方がいらっしゃるのですけれども、その方が僕に話してくれたことと関係があります。

そのころ福島で除染をしまして、除染の廃棄物を入れるポリバケツみたいなフレコンバッグが、街道に沿ってあっちこっちにたくさん山積みになっている。僕はそれを見たとき、最初「これ、どうするんだろうな」と感じたのです。そして、除染は表面の土を5cm削るというふう聞いていたのですけれども、「5センチで大丈夫なのかよ」「5センチって何だよ」と思ったのです。それが先ほども言った、当事者意識と言いつつも、当事者意識を持ち得ていない部分でもあって、東京目線でしか物を考えられていないなと、後になって反省した部分なののですけれども。



図1 講演の様子

そんな思いを持っていたとき、秋元さんと酒を飲みながら話していると、秋元さんが「監督さんよお」みたいに語り始めて、山を持っていらっしゃる方なのですが「山ってさ、いま除染がどうのこうので5センチって言うてるけども、土ってどうなってるか知ってるか？」という話をされるのです。枯れ葉が落ち、腐葉土となり、そこで栄養分が…みたいなことなのでしょうね、1cmの良い土をつくるのに100年かかると、秋元さんがそうおっしゃったんです。「5センチというと500年を持って行かれるんだ」という話をされたのです。500年というのは、秋元家は16代目らしいのですけれども、本当に先祖から受け継いできた土地、100年も200年もかけて受け継いできた土地ですよ。その5cmを持って行かれるということがどういうことか分かるかって言われたときに、「これはやっぱり土、捨てられないな」という思いになり、脚本を「あんちゃん、帰ろうよ」「あの人もできなかったんだよ」と土を捨てないように変えました。

本当は、まだまだたくさん現地の方の話を伺っている中で微妙に本を変えていったこととか、細かいディテールを変えた部分があります。また機会があったときにお話しできればと思います。どうもありがとうございました。

注

- 1) 久保田直監督『家路』は2014年3月1日に公開。2014年度の新藤兼人賞金賞を受賞。スタッフ等の詳細は公式サイトを参照 <http://www.bitters.co.jp/iej/> (2015年5月25日閲覧)
- 2) 川内村と富岡町は福島県双葉郡の町村で、福島第一原子力発電所の30km圏内に位置する。川内村は2014年10月1日に避難指示解除準備区域が解除となり、残る居住制限区域は避難指示解除準備区域へと再編された。富岡町は原発事故で全域が警戒区域に指定され、全町民が避難しており、2013年3以降は、帰還困難、居住制限、避難指示解除準備の3区域に再編されている。区域に関する詳細は福島県のHPを参照。 https://www.pref.fukushima.lg.jp/uploaded/library/141001_suiizu.pdf (2015年5月27日閲覧)
- 3) 長谷川和彦監督『太陽を盗んだ男』(1979)。理科教員の男が原子力発電所から盗んだプルトニウムで原子爆弾を作製し、日本政府を脅迫する。男は脅迫の手始めに国会議事堂に模擬原子爆弾を置き去った。
- 4) 川内村で農業を営む秋元美譽氏は、映画『家路』の撮影において農業関連のシーンを指導した。本号の「パネルディスカッション～福島の再生と科学技術コミュニケーション～」でも秋元氏のインタビューを紹介している(早岡 他 2015)。

●文献：

早岡英介・久保田直・信濃卓郎・本田紀生 2015: 「パネルディスカッション～福島の再生と科学技術コミュニケーション」『科学技術コミュニケーション』17, 99-112.